角行系富士信仰と倫理道徳

佛教文化学会会員
大谷正幸
角行系富士信仰と倫理道徳

はじめに

富士信仰、とりわけ筆者が「角行系」と呼ぶ一派は、信徒の日常生活に倫理道徳を持ち込むという点で他の山岳信仰とははなはだ異なっている。角行系は南派を繋いだが、どの立場でも日常に倫理的な生活を求める態度は一致している。一方、同じ富士信仰であっても、修験道や神道を基調とする他の立場では、角行系ほど厳格な道徳を強調しているようには見えない。ならば、その角行系に含まれる富士講・不二道・扶桑教・丸山教などの諸団体が、富士信仰を行う人たちにとっては、道徳追求は第一の目的ではない。彼らはあくまで富士山の神を信仰するためだけに倫理道徳を求める理由を考えた。

本稿を進める前に、角行系の富士信仰について確認しておく。角行系の富士信仰は何らかの理由をもってする行為であると考えられている。富士山の本拠地は、富士山の神を信仰するものであり、地理的あるいは宗教的な要因から多くの立場がある。大きく分

大谷正幸

佛教文化学会紀要 第十九号 平成二十三年三月
角行系とは異質の立場による著作と言わざるを得ない。しかし、富士講が隆盛を迎える時期にこのようなグループの存在は間かれないので、おそらく富士講に合流していったか、あるいは霧散してしまったのだろう。

二 富士講研究史にみる倫理道徳の取り扱い

角行系諸派のうち、代表的な一派は富士講である。富士講は角行系の行者である食行身禄（二六七一―七三三）の弟子を称する信者たちによって作られた。富士講は行者・少数の弟子・信徒から成り立っていた従来の角行系の在り方に集団化と組織化をもたらし、十八世紀末ごろから急速に増殖した。以後の富士信仰は富士講とほぼ同義と見做されており、その認識は戦後始められた富士信仰の現代的な研究においても同様だった。以下、古典的な研究において富士講の倫理性や社会性に言及している記述を示したい。

まず、富士講の思想研究として、信仰の合理性・内面化、職業倫理的な思考、四民の平等観を近代的な宗教の萌芽と捉えたのが村上重良である。村上は、近代民衆宗教史の研究において、天理教など近代後期から近代にかけて成立した信仰や教団を論じた中で「富士信仰」として富士講を取り上げた。ただし、村上は富士講をあくまで伝統的な山岳信仰の延長として捉えており、その点で富士講と富士信仰全体を区別し得なかった。

封建支配と本質的に敵対する民衆に支えられた富士講は、権力への従順を誇らしきもの、その教義の展開過程を経て、
次いで現れた宮田は、柳田国男の『みろくの道』を敷衍させ、元来仏教に属する弥勒信仰を、日本の伝統的な民俗や伝承から日本的なメシアンズムとユートピアンズムを持つ「ミロク信仰」として捉えなおし、民俗文化の一形態として位置づけるよう試みた。宮田は、食行身禄をこの日本的なメシアンズムの体現者として捉え、食行の行動をミロク世の実現を果たさんとした。米作の豊穣なる世界を主に、食行は富士講元祖（食行は富士講の開祖ではないがこのように呼ばれる）としての米作の豊穣なり、従来の富士講元祖（食行は富士講の開祖ではないがこのように呼ばれる）としての米作の豊穣なり、従来の富士講元祖（食行は富士講の開祖ではないがこのように呼ばれる）としての米作の豊穣なり。土壌の、仙元大菩薩の冥慮に呪詠する食行に新しい価を与えたいという点で斬新だった。

三、しかし、身禄の人間観の開明性のうらや、社会観は転じず、物価満ちない限界性を見る。彼は、四民集々の業を昼夜懸心なく勤める、社会観をパブローなどない限界性を見る。

農工商の一般民衆に対しては、父母への孝、貧乏者の勤労、父母への孝を尽すことなる。農工商の一般民衆に対して是、仙元大菩薩の冥慮に呪詠する食行に新しい評価を与えたという点で斬新だった。
を強化することを意図している。身禄のそうした志向は彼自身その時代の人間としての適応性を示していると

しかし、食行や富士講における道徳の観念は、宮田本人によってではなく、むしろこの概念を援用する安丸良夫
によって、「世直し」観念成熟への基礎と考えられた。安丸は、政治思想史の立場から民衆の思想形成を論じ、富士講から丸山教への変質と彼らの隆盛を追った。安丸によれば、民衆が支配のイデオロギーに対抗するためにしばしば宗教的形態がとられ、日本では終末観の危機意識のもとにミロク信仰と富士講が結びついて、町人へ普及する間に新たな思想形成が呼ばれたという。「ミロクの世」講から派生した丸山教に至って明治の不安定な世相を背景に暴発的な発展を遂げたとする。

引用①（食行身禄による言行録『三十一日の巻』を分析して）

このような考え方は、山岳仏教観、稲米ミロク観、即身成仏観などの伝統的意識を受けつけたものである。

しかし身禄は、伝統的意識をそのまま受容しているのではない。なるほど身禄においては、米と人間が幸運な社会がミロクの世、つまり理想世であるが、しつつもした社会は人間の努力によってもたらされるものであり、この努力という主体的契機を強調するところに身禄の独自性があった。

角行系富士信仰と倫理道徳

引用②（同じく『三十一日の巻』を分析して）

前述のように、身禄は、享保十八年、富士鳥帽子岩で三一日間の断食のすえ入定したが、そのさい身禄が

出した最後の言葉は、「正直、慈悲、情、不足」であったという。身禄が家財を捨てて「気違い身禄、乞食身禄」と
頒称されるよう、も熱狂的に布教し、ついて文字どおり生命を賭した教説は、究極的にはこうしたもったも平易な日常道徳だったわけである。こうした道徳が真摯に実践されれば、ミクロの世がやってくる、忘れ絶望的なカタストローフィがやってくる。引用３（世直し観念について総括する文脈の中で）
つぎに重要なことは、民衆の通俗道徳的自己規律（自己鍛錬が世直し観念の成熟の基礎だ）ということである。
近世中期以降における民衆意識の発展が、通俗道徳的自己規律の主張を中核とするものであることはすでに述べたが、通俗道徳を真摯に実践してきた民衆だけが確信をもった鋭い批判者たちであった。通俗道徳は、謙譲や恥従を説いて社会的批判精神を押圧するものだったが、戦後の表現を通じて通俗道徳を普遍的原理解として宣言し、こうした原理にしたがわぬ人間をはげしく糾弾することができた。通俗道徳は、敬の道難な立場からの社会批判は、こうした道徳主義的見地からなされた。

安藤の問題意識を引き続き、不二道を考察したのが宮崎ふみ子である。宮崎は、不二道を「民衆にとって封建制社会における権威から解放する思想だった」と位置づけて、「敬と相互扶助によって生産的労働での能動的主体を確立させ、民衆による意識変革の現れである」とした。

食は、人間は至善大菩薩の一を体して生まれたもので、本来等しく善である筈だと規定した。だから道徳の最終目標は「真の人間」になる事だった。その際頼るべきものは自分自身だけであり、人間は心がけ次第では善にも悪にもなる、と考えられていた。「真の人間」というのため各々の家業を勤め、家業を通じて世の中の役に立つ事と、「正直・慈悲・情・堪忍・不足」という倫理のため各々の家業を勤め、家業を通じて世の中の役に立つ事と、「正直・慈悲・情・堪忍・不足」という倫理
これらの研究がなされた一九六〇年代から一九七〇年代では、富士講の思想を代表するとの目されていた食行の思想を検討する史料として、いわゆる「三十一日の巻」が主として用いられてきた。『三十一日の巻』は、食行が富士山で断食によって自殺する際に三十一日間をかけて介添をする従来を語る著者とされる。現在、研究の水準では食行の直説として受け入れることはできない。しかし、現在の研究から数年が経過し、日本各地で行われた自治体史編纂事業の成果や、富士信仰研究の進展によって、研究に有益な史料がより多く知られるようになってきた。こういった新しい史料を活用し、より多角的に、より広い視野に立って、富士講や富士信仰を再検討する必要があるのではないだろうか。

また、食行や富士講の思想から近代的な社会変革や宗教的事象への萌芽や指向を見出すことに、研究の重点が偏ってしまってはいないだろうか。右に挙げた研究では、いずれも研究者自身が主観的に持っている思想史的枠組みが先行し、それを検証するためだけに富士講や富士信仰が論じられているように思えてならない。そのようなアプローチは、史料が読く信仰の世界を必ずしも虚心坦然に検討するものではない。本来優先すべき史料本体や書き手の呪文を考えていないのではないと考えなければならない。
三
富士信仰に倫理道徳を要請する三段階・一
（富士登山に際して精進を軽減させるため）

筆者は近世に書かれた各種の角行系文献を検討した結果、
富士信仰が倫理道徳の実践を要請する理由については
変遷が人に分けて述べたいと思う。まず、その第一は富士登山の際に行われなくてはならない精進を軽減させるためである。
近世以前、富士山に登山するためには修祓や塚場といった宗教的な手続きが必要だった。中世の連歌師である宗

誠の明かな最も古いものは寛文六年（一六六六）の版本としてされているので、筆者は宗誠真作が何かについても古くから議論がある。年代

の成立として考える。その『名所方角抄』の駿河国分寺には富士山の説明があり、

登山する際の塚墓について言及している。

富士の鳴沢と八水えと絶頂は洞のことしてましてはり峯

掘し立てた山と云う。それより絶頂迄は野山の岩砂山なり。隣国の人百日精進よりを取、六月一日より上

日
ここでいう「隣国」とは駿河に隣接する国々であり、近江国人が七日の精進で済むとされているのは、富士山が琵琶湖の土から成っている（琵琶湖の地域の土が飛んできた、あるいは陥没してその分富士山として隆起した、など異説がある）という、一般に流布していた伝説によるものと思われる。とよく、富士山に登るためには、百日の精進が必要とされていたことがわかる。文末に「禅定」と表現しているように、当時の富士登山は単に登るということではなく、精神的な意味合いもあったようだ。現在でも、中部・近畿地方には「富士塚離」とよばれる習俗がある。初夏に七日別火の参詣をした水辺（静岡県奈良県・滋賀県などでは川、三重県の沿岸部では海浜）にて水塚離を修するというものです。初夏に七日別火の参詣をして、水辺（静岡県）に近い延宝四年（六七二）に書かれた黒川道祐の『日次記事』は、京の年中行事を紹介していたもので、五月に富士塚離の日を京の市中に盛んに行われていたこの習俗を紹介している。

この習俗が七日と短いのは、『則同富士参詣行』にみられるように富士登山の代替行為とされたからであろう。実際に登山をするなら百日の塚離を求めるだろう。

『名所方角抄』や『日次記事』が刊行された当時、富士塚離は単なる風俗行事として行われていた。当時、富士塚離はまだ存在していない。しかし、富士信仰の利益を求められて彼岸を訪ねてくるものには、「二代行法次第」と呼ぶ道徳律を一生守らせることと引き換えに七日の精進で富士登山を許される。
した。  

旺心の次代、月 chó（一六三〇—一六八九）は、天和三年（一六八三）に切支丹の嫌疑をかけられ、信徒たちと
共に江戸町奉行と切支丹奉行の審問を受けた。結局は無罪放免となるが、この時の経緯を月 chó側が記録したものと
して「公事の巻」呼ばれる文献がある。「公事の巻」によれば、この審問で月 chóngは自らの生い立ちと富士信仰に
入って経緯を述べている。彼は生来病弱で、生死の境をさまよう危険な時期もあったが、薬石の効あって回復した
という。そのお礼参りのため、各地の霊地へ参詣していたが、富士山のみは五月日か百日（期間が二つある理由は
説明されていない）の精進が必要ということで踴躍していた。しかし、父の知人に数回富士登山した人で、彼
によれば七日の精進で富士山に登らせてくれる行者がいるという。その行者が旺心であり、月 chóngは旺心から二代
行法次第」を授かった。以下、「公事の巻」からそのくだりを引用する。

月 chóngは富士山に登らないと、聖書を読むことができないと考えていた。したがって、彼は毎日富士山を眺め
て、聖書を読むことを心の中で祈り続けていた。月 chóngは、富士山を崇拝し、聖書を読むことを通じて、神とつなが
る場として富士山に崇拝し続けた。
マサユキ・オダ 2011
神が愛する魚なので富士山に参る者はこの魚を忌むと紹介されている。しかしこれらの点をのぞいても、一代行
法次第一で挙げられていることは江戸町人の一般的倫理に沿っていたと考えられ、だからこそ各地の霊地に参詣し
ていた月月や父の知人も受け入れていたのだろう。

富士登山の準備として一般的に百日（または五十日）必要とされた精進は、旺心に従うならば、道徳律を一生守
ることで近江人でなくとも七日に短縮された。ただ、当時の角行系に分派は知られておらず、江戸にその存在を
知るものは少ないだろうと考えられる。月月の場合もまたま経験者に父の知人がいて、その口で waar 旺心の存在を
かじったほどのである。「公事の卷」によれば、月月は修験者など専業の宗教者から法論を持ちかけられることを日頃
から警戒しており、師も同様だったとすれば、旺心は積極的に信徒を勧誘していたことが想像できる。よっ
て、この段階では、富士信仰に道教が持ち込まれたもので、広く行われたわけではなく、ごく少数の一派で行われ
ていたに過ぎなかったということになる。

四 富士信仰に倫理道教を要請する三段階・二（世界観の導入による要求）
月行の場合

旺心のもう一人の弟子とされる月行和尚（北四三一七〇八）は既存の書物の真似から離れ、より高いオリジナリティを持った世界観を構築した。彼には『直相の巻』という著作の存在が知られており、筆者は少なくともその断片を含む（あるいは『直相の巻』全体を含んでいるかもしれない）と考えられる『一字不勢津御開き之巻』

そこで読かれているのは、『ちち』と『はは』という二人の神が富士山を中心とする世界と一切の生物を創世する、記紀神話の天地開闢・国生み神話にも似た神話である。この二人の神が人間を作った時、その食用として米（角行系ではしばしば米を「ほさつ」と訓む）を作って与えたという。親が子を懸命に育て、太陽は暖め月は水
日月仙元大菩薩の御直符に御座候。うたかた人恵ささい成べし。諸人能と信心可被成候也。
八戒（本文では「八海」と表記されている）の項目はそのまま数えると五項目（銘の不正不可・非道の利益不適可・家職第一・同行誹謗不可・売春と不倫の禁止あることになる。最初の三つを家職、特に商業・金融の倫理とし、一項目に複数の内容があるため、一つの項目として考えることができる）。

また、「朋輩同行を嫉むべからず」であるのは、おそらく同門の信用、弟子同士に対して負の感情を競争したことにとえる。「朋輩同行を嫉むべからず」という行者と同一人物かもしれないが、それは同行は町人ばかり二十一人の小さなグループだったらしい。おそらく、父の月行による「朋輩同行を嫉むべからず」という戒めもある。

ともかく、これらの戒律として提示された教誡を守る根拠が《直相の巻》冒頭で説かれる個人と教義の起源を説く神話的エピソードや、月行が神より受けた新しい世界の始まりに関する神物に関する、という程度の大きさの仲間たちを信頼できるものだったと考えられる。

前述の富士信仰研究史で盛んに取り上げられていたように、月行の弟子の一人・食行身禄はこの系統や後に現れた富士講を代表する行者であると考えられている。それは、「彼が「身禄の御世」と呼ばれる富士山の神によって統治する富士講を代表する行者である」と考えられている。
角行系富士信仰と倫理道徳

第七

現代の訪れを、元禄元年六月十五日に神から告知されたとされてきたこと、そしてその神話に基づいて富士山で
自殺したことによる。しかし、その神話を受けたのは師の月行だったということが『直相の巻』の発見によって明
らかになった。食行はなくとも本種類の著作を残しており、そこには『直相の巻』に類似した神話が述べられ
ている。両者を比較することは今後の課題となるのが、食行の神話は月行のものより堅かった模様を持っている。

南無仏様・南無仏元大菩薩様・南無大長日光仏様の御用為被為家所は、御藤山之内にありて天と申して、
一日の冠様甲所にて御座候、御いしや所は京の庄い天の内にて御座候、それ故京の庄い天の内は、いさ
いものにはいり申事はなり不申候にわけははるめんでのそねりたるかしやうを一筋にしてまほほのしゅ生もろとも御たけ被
候と御礼申。向るはるめはるめいでのそねりたるかしやうを一筋にしてまほほのしゅ生もろとも御たけ被
候と御礼申。向るはるめ申の内。

写真にはみえないので理解が困難です。ご理解いただけますようお願い申し上げます。
『富士御伝書』の場合

当時の日常生活において、日月の動きと太陽による昼夜の区別は、世界が循環的に運行しているものと住人に感じさせていたらしい。食行による勤労の勤行は、その感覚を自らの信仰と神話に結びつけたものである。

伊勢屋弥平次が、『富士御伝書』を前掲とした富士信仰を行っていた。『富士御伝書』は彼が属する組織の集団ではない可能性が高い。しかし『富士御伝書』には角行系の行者への尊崇を示していた点を加えて、『富士御伝書』は角行系に属する集団ではない可能性が高い。
ともかく、『富士御伝』によれば、士農工商の各職が働くことは天地の運行と一致する行為であると説いてい
る。『富士御伝』では士農工商四つを一に分けてその労労の徳を説くが、ここでは総説にあたる部分と著者が
そうだったであろう商人についてのくだりを取り上げる。

引用(1)

挙又士農工商の四民にそのハリたる職分を元としてめいいく年月をおくる事まことにこん日たすかるその元へ
水と火と米の御こうおんのありかたき事あり。めいいくも日夜朝夕はたらいきのわけも行道にしたがい。かく相分
夜大切にその家職を相勤べきせんやうなり。何れの家にそなへると事へ共かんへなきものなかれども
もよくかしてつくる人もまれなりし。

引用(2)

あきんとハ今日その役かせきするも日月の行道に同じ。商人ハ人の宝と言へり。山海村里を道てて、住居の人
あり。その所へ品と入るべき米油薪食物色所、事かへやうにもちはこび自由にせし事は万民のたすか
りあきんとあきれ時万事をゆう成事多しと言へり。金銀米錢たくさんに行った家競諸道具共に買もとるも
りに同し。諸者貯ととのへ自由にいたし家競諸道具共に買もとるも高利なるあききものなり。

士農工商の道にわかれたる事前生より相続しつる其めいいくその家へをあげ事あり。賣人も買人も
天地合時日月行道のとハリなり。あきんとその心得にて高利なるあききものありないのでかしめ
に所作有りておやをやしないさき子をはこくみ事はひとへに今日天照を御親ならずや。他力はもへ
のとハリ所もつて世渡す三光の御めくみを以て。早朝に八朝日を拝みた部に八月星をいだだきて情力を
七九

角行系富士信仰と倫理道徳
五
富士信仰に倫理道徳を要請する三段階（社会人としての利益を目的とした要求）

最後の段階は、自己の修練や利益を目的とした要求である。登山の負担軽減ではなく、特定の世界観を導入したものを多くなく、そのような前提に関連なく自己の修身・繁栄・後世安楽などを期待する。

『富士御伝書』から四十年後、江戸市中の富士信仰は富士講の時代になる。彼らは食行の弟子を名乗るものたち（食行の神話によって提示された未来を食行本人の昇天によって締め括られていたことからもわかるように、食行は後継者を設けなかった。）によって作られ、集団化はもちろんのこと、講の名前の下に組織化されているのが特徴である。彼らは講の創設者（食行の直弟子を名乗る人物）を講祖として角行・食行と並んで尊敬することからある小グループ群が富士講の前駆的な存在だったことは想像に難しくない。

以下に紹介する富士信仰独談手習真月雑（天保二年 [1831] 自序、天保五年初版）は、そのような富士講の一つである東講の講祖・南沢正兵衛と弟子の山本善光によって書かれた。自序によれば、文政三年（1820）に死去した南沢正兵衛が書き残した世中の教訓を、山本善光が増補してまとめたものとされる。南沢の設立では浅草・小田原・日向城ケ崎、（宮崎県宮崎市）にも信徒がいた。おそらく、小田原や日向城ケ崎の信徒は、当時の発達した水運を介した、商業的なつながりによるものだろう。

引用(1)

角行系富士信仰と倫理道徳
富士信心独談手習真月集は「大学」や「徳然草」といった和漢の古典や故事をよく引いているが、書き手はマサヨヒコと名を連ねる。この書はもともと上毛正兵衛没後に彼を記念するために出版され、講中だけで配布されたが、後に改版・大関為秀の序が追加されて一般の書籍でも売られた。大関の序は文保九年十二月なので、実際は翌年の刊行なので、富士講の文献が、このような形で流通することとは大変珍しい。それは、この書が豊富な引用を駆使していることからもわかることから、読み手に特定の宗教的立場や世界観を強いていないかからこそ可能だったのではなかろうか。

本書に説かれる倫理的な勧奨は、ストライクではあるが特別に宗教的環境を強いるものではない。また特定の世界観を前提にしておらず、むしろ著者たちの意図とはあべこべに、富士信仰の形を借りて通俗道德を説こうとしているように見えるかもしれない。富士信心独談手習真月集は、書き手にとって、社会に生きるものとして、勤勉で勇気ある人間関係を築き、自分の心を磨き、心を問いただすことが、己の世界観を構築するための重要な要素だったのではないか。
本稿の結論は、「富士信仰が倫理道德の実践を要請する理由には、段階的な変遷があり、その変遷は彼ら自身のあり方を影響されている」ということである。

八四

六 おわりに

角行系がその軽減のために倫理道德を導入したのが最初の段階である。これは角行系がそうした伝統的な信仰に左右されない単独の系譜として現れ、重い精進を勧めがたい都市に住む非宗教者たちを信徒としていたこととを示している。次にこの段階では、角行系が市販の宗教書から知識と思索を蓄積し、著述によって自らの信仰世界を表現する手段を獲得したことにより、その中に織り込まれる形で倫理道德が説かれた。

文庫に挙げた論文が、本稿で紹介した各文献によって語られる倫理道德についての主張と合致しているか否かを示したかたからである。先行する論文が提示した角行系の倫理道德についての考察は、一定の価値・意味を、敬意を持って認めなければならない。

不労津御開基之巻に「富士御伝書」「富士信心独譜手習真月書」は、筆者が史料を探求した末に公表したもののである。
ある。
「富士講の歴史」刊行から約三十年が経過し、現在に至って富士信仰の研究に使える史料が質量ともに向上してきていることは明白である。また、それらをつぶさに見ることで、従来の研究とは大きく異なる所見を得られるようになっている。今ある史料を、その史料自身が用意している文脈に従って直読していくことと、未だ知られていない史料を発掘し、富士信仰史の中で位置づけることによって、富士信仰の実態をより正確に把握することが、それを今後の富士信仰研究の基本的な姿勢となるべきである。世直し観念やミロク信仰の研究や特定のイデオロギーなど、富士信仰と直接関係しない現代的な歴史学や民俗学による論理や思想を前提としないことも、富士信仰の研究は、富士信仰の史料に在する論理を用いて組み立てられるべきである。「世直し観念やミロク信仰の研究や特定のイデオロギーなど、富士信仰と直接関係しない現代的な歴史学や民俗学による論理や思想を前提としないことも、富士信仰の研究は、富士信仰の史料に在する論理を用いて組み立てられるべきである。「世直し観念やミロク信仰の研究や特定のイデオロギーなど、富士信仰と直接関係しない現代的な歴史学や民俗学による論理や思想を前提としないことも、富士信仰の研究は、富士信仰の史料に在する論理を用いて組み立てられるべきである。「世直し観念やミロク信仰の研究や特定のイデオロギーなど、富士信仰と直接関係しない現代的な歴史学や民俗学による論理や思想を前提としないことも、富士信仰の研究は、富士信仰の史料に在する論理を用いて組み立てられるべきである。」

注

① 拝啓「富士信仰から角行系宗教へ」彼らは「新宗教」か否か。宗教研究、三四〇、三四〇四、また特に幕末から明治にかけて月行から派生した小グループについて考察している。

② 拝啓名古屋市遂左文庫所蔵「富士御伝書」にある近世初期の富士信仰「仏教文化学会紀要」十七、二〇九参照。前者においては「富士御同行行」、後者においては「富士御同行行」。
宮崎登平「ミクロ信仰の研究」新訂版、未出版、一九七五、初版は一九七○、一六七頁。

安里良夫「日本の近代化と民衆思想」青木書店、一九七四、引用①は「二〇三、同②は「二〇三、同③は「二〇三、同。

例えば、星加宗一「宗検名所方角抄考」文化書房、一九七四、一九七頁。

「伝言の寺書の遺伝」の著者は二代目・三世旺心・四世明月のいずれかと考えられる。また、「伝言の寺書の遺伝」本文の翻刻については、伊藤堅吉『富士講の性典』富士博物館、一九七四、参照。

批判「生来未分語」翻刻『富士講の性典』富士博物館、一九七四、参照。

批判「寺書の遺伝」の著者は二代目・三代旺心・四世明月のいずれかと考えられる。また、「伝言の寺書の遺伝」本文の翻刻については、伊藤堅吉『富士講の性典』富士博物館、一九七四、参照。

批判「ある富士信仰の写本と月行作『直相の巻』『仏教文化学会紀要』十一、『一九九九』を参照のこと。

批判「ある富士信仰の写本と月行作『直相の巻』『仏教文化学会紀要』十一、『一九九九』を参照のこと。

批判「ある富士信仰の写本と月行作『直相の巻』『仏教文化学会紀要』十一、『一九九九』を参照のこと。

批判「ある富士信仰の写本と月行作『直相の巻』『仏教文化学会紀要』十一、『一九九九』を参照のこと。

批判「ある富士信仰の写本と月行作『直相の巻』『仏教文化学会紀要』十一、『一九九九』を参照のこと。